Die Entwicklung der deutschen Psychologie seit der 2. Hälfte des 19. Jahrhunderts (seit W. Wundt) bis heute

「19世紀後半（ヴント以降）より現在にいたる

ドイツ心理学の発展」

Prof. Dr. Wilhelm Arnold

(übersetzt von Prof Dr. Taketoshi Takuma)

限られた時間の中で、ドイツにおける心理学の発達を概観するためには一定の制約を設けなければなりません。かりにドイツの心理学が1879年ライプツヒ大学に心理学の実験室が設立された時点から始められたといたしましても、そのあとのあふれるばかりの文献の中からどれを選択するかについては大胆な取捨選択を行わなければなりません。もっともこのライプツヒでの出来事をもって始まりとすることは、性格学者のバーンゼン (Bahnsen) やメスメル (Messmer) の実験などを考慮に入れると、歴史的に適当ではないと私は考えているのですが、こんなわけで、この講演を準備するにあたり、私はまず「どんな科学的な基準をもって選択を行うべきであろうか、どんな選択が可能であろうか」という問題からとりかかったのであります。つぎに述べる2つの基準はまず多くのかたの支持を受けることのできるものと考えます。

それは空間と時間の2つの基準であります。つまりドイツ心理学が知り得たことや見出したことはドイツの外の世界で認められ、そしてそれ以降、反証があげられることも部分的に縮小されることも、撤回されることもない場合に、始めて一般的に広く評価されたことになるのであります。まずはじめに一般的、体系的心理学の分野があります。ここで私は機能心理学を主た

る問題として取り上げたいと思います。心的諸機能の組織の発達については要素心理学の立場から研究がなされ理解されましたが、その意義は今日の心理学においてもなお失われておりません。ウィルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt)、グスタフ・テオドール・フェヒナー (Gustav Theodor Fechner)、ウィルヘルム・ウェーバー (Wilhelm Weber) による研究は基準となるものであります。今日におきましても機能に関する問題は心理学者だけでなく、多方面で興味をもたれ重要視されるものであります。次のような質問について考えて下さい。知覚する生命を考慮しないで診断を下すことができるだろうか、さらに心理学の研究対象から機能をはずすことは可能だろうか、精神的経験に注目するか、行動に注目するか、または感情をとるか意志作用をとるかといったことは別にしてです。19世紀の心理学は主に知覚の諸機能の研究、すなわち、視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚などの研究に限られていたということが出来ます。

20世紀の心理学はいわゆる“より高等な”経験を扱っているといえましょう。つまり気分、感覚 (Bollnow)、意志 (Ach)、決定の問題 (Thomae)、感情 (Krüger) などです。思考の心理学はキュルペ (O. Kulpe)、カール・ビューラー (Karl Buhler) などのヴルツブルグ学派の人々によって始められました。記憶についての研究はエビングハウス (Ebbinghaus)、性格の問題 (構造連関) はレルシュ (Lersch)、ヴェレック (Wellek)、クラークス (Klages) によって創始されました。このほか見出し語的にあげてみますと、ゲシュタルト心理学 (Metzger)、表出の心理学 (Ru-

注 本稿は1978年9月3日、横浜国立大学で開催された日本教育心理学会第20回総会における講演の全訳である。講演は英語でなされたが、本稿はアーノルド教授自身のドイツ語の原稿によった。英文からの訳出にあたっては佐山薫子さんの全面的な御協力を頂いた。
託摩武俊 (東京都立大学)

dert), 筆跡の心理学と筆跡の比較 (R. Heiss ほか), 構造心理学と全体性の心理学 (Felix Krueger) があります。以上のように科学としての心理学がとり上げた諸問題を列挙してみますと、諸機能を部分的に説明するだけでは十分でなく、これらの機能はすべて「機能の連関」としてみなければならぬことが明白になります。短期記憶と長期記憶とは確かに違いがあります。しかしどちらにしても記憶・再生・保持といったことが問題なのです。このひとつの例からもおわかりのように、こうした構造上の関連がいろいろな機能自体のあいだに存在しているのですから、これを無視すれば事実を曲げることになるのです。すべての機能は全体的な関連の中にあります。したがって分子論の心理学からは部分的な知見しか得られないのです。

しかし過去における諸研究を概観してみてもわかることは、初期のドイツの心理学者たちはあまりにも枝葉末節にとらわれ過ぎていたということです。全体は単に部分の集積なのではなく、はるかにそれ以上のものであることに彼らは始めから気付いていたわけではないのです。細部にもまた全体にも注目することはいつの時代にも目的とされてきました。そのために体系的な教科書が何度もつくられました。いくつか例を上げてみますと、ウイルヘルム・ヴントの弟子の1人であるテオドル・エルゼンハンス (Theodor Elsenhans) が1912年に出版した心理学の教科書、また第二次大戦後の西ドイツでゲオルグ・アンシュツ (Georg Anschütz) による「心理学」と題する体系的な教科書があります。この書物は第3帝国時代に出版できなかった心理学の研究、とくにユダヤ人の学者による研究の概要を知るために非常に有用でした。ここで私は単にフロイトのことだけを言っているわけではありません。もう一人、すぐれた心理学者であり、また教育学者でもあったフィシャー (Aloys Fischer) についてふれたいと思います。彼はミュンヘン大学で私が師事した先生でもありました。彼はバイエルンの森の日雇い労働者の息子として生まれ、バイエルンのウィッテルスバッハ王家 (Wittelsbach) の王子たちの先生になり、のちに大学の正教授になった人です。

当時の時流とは無関係になされた、もうひとつの系統的な試みとしてはアーノルト (W. Arnold) の「ひと・性格、人格」(Person, Charakter, Persönlichkeit) があります。これはドイツ語で4版を重ね、日本版やスペイン版もできています。

ひと、性格、人格という心理学の3つの問題は1978年1月、シェール西ドイツ連邦大統領およびドイツ連邦議会議長カルステン教授の後援を得て、ボンで開か

れた「教育する勇気」と題するシンポジウムの主題でもありました。

ドイツでは、また心理学の辞書も系統だった教科書を補足する意味でいくつか出版されました。ここではドルシュ (Dorsch) によるものとフレーリッヒ (Fröhlich) によるものの2つの心理学辞典をあけておきます。こうした辞典が簡潔に関連項目を説明するのに対して、トーマ (H. Thomae) の編集した「心理学ハンドブック」(Handbuch der Psychologie) は心理学の各分野にわたるすぐれた情報を集めてドイツの心理学者に提供しました。辞書とハンドブックの中間にあたるものに「心理学レキシコン」(Lexikon der Psychologie) 全3巻があります。これはアーノルトが英国のアイゼンク (Eysenck) とフランス系のスイス人マイリ (Meili) と共同で編集したものです。本書の出版は単にドイツ人の業績にとどまらず、400人もの著者が分担した国際的共同作業の結果でもあります。ロンドンで出版され、ニューヨーク、ローマ、マドリッドでペーパーバックになりました。世界の四大言語で書き表わされたことになります。

いくつかの国際的な業績にもかかわらず、今日のドイツ心理学は前世紀後半に得られたような評価を得ていないようです。この理由として、次のようなことが考えられます。

a) ドイツ語は英語やフランス語ほど国際語になっていません。そこで心理学の分野におけるドイツ語の出版物は英語やフランス語による出版物ほど注目されないのです。このギャップを埋めるために、ドイツでは英語による定期刊行物の出版計画が進められています。目的は、先ほど述べたような言語による不利益を克服して、より多くの注目を集めるようにするためです。ただここにひとつだけ心配されることがあります。それはこの英語によるドイツの特別刊行物が、もしドイツ内にみられるあらゆる傾向を網羅することができずに幅の狭いものになってしまったとしたら、さらに現在の国際的な関連に十分な注意を払わなかったとしたら、すべての財政的努力は利用されることなく終わってしまうということです。

b) 19世紀後半と比較して、現在のドイツ心理学が国際舞台から後退している第2の理由は、研究があまりに細かい点にとらわれ過ぎていて、全体的な関連を見る立場を見失っているということにあります。

このために最近ドイツ心理学ではいろいろな「革新」がさまざまな領域で文字通り進行しております。

こうした革新は諸外国で始められた研究や過去に行われた研究がもう1度、現在のドイツにもち込まれる

という形で行われています。例をあげてみましょう。

1) 動機の問題、動機と遂行の問題、これは主にアトキンソン (Atkinson) やマクレランド (McClelland) が取り上げた研究ですが、ヘックハウゼン (Heckhausen) によってドイツに持ちこまれました。彼は第2次大戦後、アメリカにおける新しい動機づけの心理学の発達をまさにその場で体験した人なのです。

2) グループ・ダイナミックスの問題についていえば、これはホーフステッター (Hofstätter) がワシントン州立大学に滞在したあとドイツに移入したものなのです。

3) 目下のところまさに進行している革新はどこかといえば、人に関する心理学の領域で行われているものとみることができます。かつてウィリアム・シュテルン (William Stern) がドイツにおいて人格論的心理学を創始し、この心理学は1945年以後、アーノルトによって、その著書 *Person, Charakter, Persönlichkeit* の中でさらに発展しました。一方ロロ・メイ (Rollo May)、シャルロット・ビューラー (Charlotte Bühler)、マズロー (Maslow) などの人間主義心理学もアメリカにおいて拡がりつつあります。アメリカの人間主義心理学が1971年に国際会議を行ったのはドイツのヴェルツブルグにおいてでありました。

現在、人間主義心理学の基本的な考え方は世界中いたるところにみられます。このいわゆる「第3勢力」によってアメリカ人たちは行動主義や精神分析に対抗しているのです。

ロシア人はこれまで極度に専門化された反射論的心理学にパーソナリティの心理学を取り入れ、それによってパブロフ (Pavlov) やベヒテレフ (Bechterev) によって築かれた生理学的基礎を注目すべき仕方でも拡大しています。その第1の貢献者はモスクワの教育学アカデミーの現会長プラトノフ (Platonov) です。

4) ドイツでは人間主義心理学の領域を越え、かつ教育の全分野を包括する注目すべき発展が始まろうとしています。学習理論が非常に高揚したあと、10年ほど前から強い人間的アプローチが基礎を固めつつあります。この新しい傾向は「生活の質」を向上させようという政治的スローガンとともに始められました。このスローガンはまた教育の目標でもありました。人間性強調のこうした傾向が強まったのは、学習心理学がその膨大な個々の理論 (試行錯誤、強化、有意味学習など) にもかかわらず、学校制度の新しい組織に教育的な指導・援助をなし得なかったことがきっかけでした。実際、学習心理学の領域における文献は非常に多く、概観することすら不可能なほどですが、教育の現

場に決定的な刺激となるものはもたらしてないのです。

5) 心理学内部のこうした革新の第5番目の分野は統計学だと思います。実は私は大学で数学を専攻いたしました。私の先生のフィシャーおよびリヒャルト・パウリ (Richard Pauli) の指導によって心理学に移ったのはそれからあとのことです。こんなわけで数学者であり、また心理学者でもある私はこの2つの科学の関係について一言、批判させて頂きたいと思うのです。もし私が数学は心理学にとって補助的な学問である、しかもそれは物理学や化学にとって数学が補助的であるのと同様であるといったとしましても、この「補助的な学問」という言い方は少しも価値を低めるものではなく、単に機能的な分け方を意味しているだけに過ぎません。純粋な数理心理学は狭い経験的土台しかもっていません。心理学者はこのことを常に心に留めておかなくてはなりません。計算され得るものというのは経験するもののほんの一部分に過ぎないのです。

1945年以降、西ドイツにおいては統計的方法、とりわけ因子分析がさかんに用いられました。これは主にアメリカ人によってもたらされたもので、彼らはこの新しい方法を、かつてスピアマン (Spearman) が統計学について新しいアイディアを得た (ライプツヒヒ大学) 国に、また関連の計算がすでに何十年間も引き続いて教えられている (たとえば、ミュンヘン大学の数学者であり哲学者であり、心理学者でもあるヴェンツェル (Aloys Wenzel) によって) 国に持ち込んだのであります。統計的方法が心理学、とくに社会心理学の領域や多数を扱う集団実験にとってどんなに重要なものであったとしても、それはさまざまに繰返して行う集団調査に基づいて証明するひとつの方法に過ぎないことをつねに心にとめておく必要があります。エビングハウスの時代には記憶の実験は個別実験として行われました。当時、知覚の実験は視覚、聴覚、また選択反応の実験として行われていました。しかし、つねに少ない数に基づいて比較がなされていました。実験のデータはわずかな被験者数に基づいて算出されていました。現在の、数においてはなお少数ですが、確率の点からははるかに厳密に検討されている研究の結果のほうが果たして信頼性が高いのだろうかとは私は疑問をもつのです。かつての数学者として発言させて頂くならば、今日の心理学の研究はドイツでも多くのものがなされていますが、その妥当性、客観性、信頼性にもかかわらず、少数の被験者でなされている研究は疑問の余地があるのではないかと思うのです。薄弱な実験の結果は巧みにしくまれた計算方法を用いても

信頼性を高めたり、安定させたりすることはできません。たとえ、その評価にあたって中央値だけが考察されるような場合であっても、研究というのはいつも被験者の数が多ければ多いほど信頼性を増すのです。このように統計学を強調することについての疑問は心理学だけでなく、いかなる他の人間科学にもあてはまるのです。

以上、いわゆる革新といわれるものについて批判的に述べてきたわけですが、つぎにこれと反対にドイツ心理学の特筆すべき成果について紹介したいと思います。

研究および実践の分野においてドイツにおける戦後の心理学は新しい傾向を示しました。実践の場における新しい動きは適切なものであることがはっきりしました。新しい理論、とくに最近になってやっと認められるようになったパーソナリティについての理論は、今までのところ、ドイツ国内においても国外においても、とくに目立って普及するようになってはおりません。もっともドイツ以外のパーソナリティの心理学の領域では大きな一致がみられ、それには十分な考慮が払われています。

次に応用心理学の成果について述べてみたいと思います。これなくしてはドイツ心理学の現状を語ることはできないと思うからです。応用心理学の基礎ははじめから現在にいたるまで診断の方法におかれてきました。その間、知能テストは診断心理学の発達における最初の重要な段階でした。したがって、ここではフランスの心理学者ビネー (Binet) の名をまず上げたいと思います。次にアメリカの応用心理学を導入した老大家フーゴー・ミュンスターベルク (Hugo Münsterberg)、またドイツのミュンヘンに勤労学校 (Arbeits-schule) を設立し、マサチューセッツに職業学校を創立したケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner) を忘れてはなりません。さらにレイ (Lahy) やそのほかのフランスの科学者とともに心理技術学の分野を開いたギーゼ (Fritz Giese) とルップ (H. Rupp) の名前もあげたいと思います。このために現在のドイツの研究者たちは人間工学、労働科学の領域で国際的な信用を得ることができているわけです。東欧圏についても同様です (1975 年にブラティスラバで国際コロキウムが開かれました)。以上、細かいことを述べましたが、西ドイツにおける応用心理学の一般的動向を知る手がかりをみなさんが得て下さればと思います。

次に心理学の専門家の興味をひくだけでなく、専門外の人々や西ドイツ以外でも注目を集めた特別なことについて強調したいと思います。まず年代順に申しま

すと、戦後、ドイツ経済が再建されるのにあたって、雇用の問題が解決されたことをあげなくてはなりません。この問題は戦争のために何十万という若い人々が適当な教育を受けられなかったことから生じました。しかし若い人々も働く場所を見つけなければなりません。職業指導の当局は若い人たちをそれぞれ適した職業につけることに成功したのです。そのためにまず、作業の標本、性能テスト、集中力テストなどが用いられました。さらに個人的な調査やカウンセリングによってこれらのテストは十分に補足されました。

若い人たちは職業訓練機関で、これまで欠けていたこと、つまり学校で習うべきことを学び、さらにさまざまな職業の分野で、職務上、必要とされる資格を身につけました。敗戦直後のドイツの経済危機は結局、このようにして克服されたのです。診断法は戦前からドイツの職業相談で用いられていましたが、さらに新しい評価基準が加えられました。イタリア、ギリシャそしてオーストリアやスイスの一部でもこのような試験の方法は採用されました。

戦後、一応改良された技法、すなわち妥当性、信頼性、客観性において改良された補足的な技法が導入されました。しかし今日、専門家の報告によると、こうした統計的な改善 (私もこれは科学という観点からみて必要と思いますが) にもかかわらず、西ドイツ連邦労働局の人選は本質的には改良されていないということです。1945 年以来、この連邦機関には 350 名もの心理学者が働いており、これは西ドイツにおける心理学者の最大の雇用主であります。このように見てまいりますと、昔からいわれている真理、すなわち、方法の改善によって成功をおさめるためには、その方法を用いる心理学者の質が方法の改善に追いついていかなくてはならないことを再確認させられるわけであります。いうまでもありませんが、これは医学についても言えることです。

応用心理学の分野で 2 番目に大切な出来ごとは心理—教育の分野でおこりました。

西ドイツにおいても他の国々におけるのと同じように現行の教育制度に対する不満が高まっています。教育問題にかかわる政治家たちはワトソンの言った意味での奇跡が教育方法においても生ずることを期待していたのです。ワトソンが自分に生まれたばかりの赤ちゃんをくれれば、天才にも犯罪者にもしてみせようといったことはよく御存知の通りです。人間を操作可能とみるこの考え方、すなわち、人間は人工的につくことすらできるというキャッチフレーズは、こうした政治家や理論一辺倒の教育者たちに時が経てば幻滅

と失望に終るしかないような非現実的な学校の計画を立てさせてしまったのです。また社会的観点からみると、こうした空想的な理論家たちはあらゆる政治的階層の人たちをそそのかして、だれも実現を可能にすることのできないような希望を抱かせてしまったのです。あまり才能のない若者たちも高価な教育的補助手段をもってすれば、他人にひけをとらない能力を得ることができるという約束がなされたとき、結局は到達することのない教育的ユートピアに向って第1歩がふみ出されたことになるのです。失望する人々の数が何十万にも達したとき、各政党は教育理論の上で教育的ユートピアをひっこめ、さらに実践の場においてもほとんど手をひくことを余儀なくされたのです。教育関係の政治家たちは、己れの弱点を慎重にいちじくの葉でかくし、狂した罪を赦罪しなければなりません。ある者はまことに巧妙に、手際よくこれを行いました。そのとき以来、彼らはいちじくの葉をつけたまま、西ドイツの教育の楽園をはねまわっており、彼らの変り身の早さをみせつけてくれています。現在、寄付金も減り財政的にも不振になって、教育心理学の花の時代は過ぎてしまいました。ここに科学としての教育心理学が再び前進するという望みがわいてくるのです。なぜなら理論におけると同様、研究の分野においても必要は発明の母という諺はあてはまるからであります。

1つの例をあげましょう。どの程度の奢侈が行われているかについては、テレビで「心理学」の番組を制作するのに一千万マルクが使われたという事実から見当をつけて頂くことができます。この金額は西ドイツのすべての心理学研究室の年間予算を合わせても及ぶものではないのです。この研究計画を担当した人が最近出版した報告書によると、結果は彼らの失敗を物語るものであったといえます。このような告白は専門家を驚かすものではありません。最初から指導的な心理学者のほとんどはこの計画に賛成せず、参加しなかったのです。この研究計画の失敗はそれなりに意味がありました。なぜならこれは今後の心理学の発展に警鐘を鳴らす役割を果たしたと考えられるからです。なぜこの計画が失敗に終らなければならなかったか、理由は明白であります。それはこの企画が将来の心理学に新しい道を開くと考えられている個人の心理学、人間主義の心理学の原理に背いているからです。

こうした企画では、人間の科学はそれがいかなるものであれ——医学であっても心理学であっても——若い人々に対する教育は、生きた人間との直接のふれ合いのない通信教育で十分できていると思っています。

ここでの警句は「人と自然に帰れ」であります。

同時に多くの教育関係の政治家たちは、教師の不足はティーチング・マシンを使うという方法で科学的に十分補えるという見解をもっていました。しかしこの予想とまったく反対のことが生じました。教育の現場で人格をもった教師の存在は生徒と同じように不可欠なのです。どんな機械も教師の職務を完全につとめることはできません。文化の伝達においても、知識や技能のまったく機械的な伝達のためにも機械は教師の役を果たすことはできないのです。

他方、心理学は適性研究の領域で能率のいいテストを生み出しています。5000人に及ぶ青年に綿密な経験的研究をしたところ、上級の学校に進むことのできる資格をもつものは同じ年齢群の若者の10~14%を越えるものではないということが判明しました(アーノルトによる)。しかしこの調査結果は、当時、教育を担当していた政治家や自らを進歩的と称する心理学者によって無視されました。その代りに彼らはできるだけ多くの若者たちを高校卒業資格試験に合格させ、大学に進学できるように教育的な援助を展開し始めたのです。

このためドイツの大学は学生で溢れ、いわゆる入学者制限や講義のボイコット、大学卒業者の就職難などの問題が起ったのです。

ドイツの心理学者たちは折をみて、十分な証拠に基づく警告を発したのですが、これはどの政党の政治家からも無視されました。彼らはむしろ一般大衆の声に耳を傾け、学生と両親の増大する一方の要求に屈服するのでした。

彼らは票を失いたくなかったのです。というより折あらば競争者の票も獲得しようとねらっていたのです。その頃、ある学生たちが高等学校教育、ひいては大学教育に興味をもつ若者たちをできるだけ多く集めようと、国中を歩きまわり、一種の教育の宣伝をするということさえありました。これが大学の定員オーバーをもたらし、前述のような影響となって現われたのでした。若干の心理学者たちがこの点について行ったまことに時宜を得た適切な警告は学生やその親たちには理解されなかったし、さまざまな立場をもつ政治家たちに聞いて貰うことができなかったのです。他の政治家たちは民衆の声にそそのかされたとはいえ、好ましくない判断をしてしまいました。20世紀において民衆の声は神の声ではなかったし、これからまたそんなことはないでしょう。無理解と誤った判断が個々の人々にも一般大衆にも影響を与えて、社会の全組織が被害を受けました。学習の可能性に基づいて自分の立

場を知るものだという心理学者の立てた予想の正当性が今日いたるところで確認されつつあります。不幸にも社会の損失となることが起ってしまったのです。このようなことからわれわれは今、教育政策が悲劇に直面しつつあることを実感できるのです。この危機にあたって人々は再び教育と文化について考え、業績、適性、動機の問題に注意をそそぐようになるのです。

人間を全体として考える観点が心理学的診断において再び強調されています。これはまじめに考慮されてしかるべきことです。結果として教育相談や職業相談がさかんになり、科学的支持を得るようになりました。

このことに関して、1976年にヴェルツブルグで行われたIRTAC(カウンセリングの発展のための国際円卓会議)のなした貢献を忘れることはできません。またすでにふれましたが1978年1月に行われた「教育する勇氣」と題するシンポジウムも同様な成果を上げました。

フランスの文化と教育に関する行政機関の専門家たちは公共のカウンセリング施設の重要さをわれわれに教えてくれました。とにかくフランスはカウンセリングの分野でビネーにまでさかのぼる長い歴史をもっています。理論的な面でも実際の面でも指導的立場にあるドイツの教育専門家が合同で開いた会議でも文化の職場の問題が討議されました(1976年11月と1977年11月のヴィルトバート・クワイトでの会議)。このフランスとバイエルン州の研究グループの会合の司会者として私はフランス側より教育政策に与えられたさまざまな刺激に感謝したいと思っています。

以上、応用心理学の今後みこまれる発展について、その概要を述べたわけですが、これはもちろん理論心理学の進歩に依存しているわけですので、この講演を終えるにあたり、応用心理学の今後の発展にきわめて重要な理論的基盤について述べたいと思います。およそ人間の科学において、心理学も当然これに含まれますが、「人」の問題は人間一般、人間性の問題と同じように大切であることはいうまでもありません。

したがって、これからの心理学は比較行動学のみではありません。かつて心理学はいろいろな形の行動主義をのり越えたのですが、それと同じように反射学を越えて進むことになりましょう。すなわち、一方で操作的な測定や比較を用いて発展していきながら、他方で現象学的に考えることや直観することもさかんになるでしょう。なぜなら科学としての心理学は新しい概念なしには現在のレベルを越えて成長していくことは考えられないからです。観察と測定は、主観的経験において自分自身や他者の共感が不可欠であるのと同じように、心理学にとって本質的かつ決定的なことであ

ります。心理学はフランスのル・センヌ(Le Senne)、スイスのクラークス(Klages)、ドイツのレルシュ(Lersch)の業績を想い出しつつ、性格学の問題に再びもどることになりましょう。行動の研究も身振り・表情、パントマイム、スピーチや言葉の言い回しなどに表現されたものを観察することも含むようになるでしょう。いずれにしても人間の生活と存在について広大な未開拓な分野が心理学の前に広がっているのです。とくに経験心理学および比較心理学についてはこのことがいえると思います。あらゆる可能性の中で、今後のドイツの心理学の基本問題は、人間行動の無数の様式と人間の生き方のさまざまな形、およびその全体像を探究することであると思います。それと同時に個々の人間の存在を基盤とした個人の行動の諸相も考察しなければならいでしょう。こうした発展は一国だけで孤立して行えるものではありませんし、またそういうことはないでしょう。将来はいままで以上に純粋な、学問についての国際的協力がなされていくと思います。

パーソナリティの心理学がこれに対して大きな役割を果たすであろうと感じています。パーソナリティの心理学は科学的な発達に対して決定的な影響を与えるであろうことが予測できます。そしてこのことは、これまで得られてきた洞察や知見を統合し、役立てるという点で、深層心理学や反射学といった他の個別の領域のどれにも増して大きな貢献ができると思うのです。パーソナリティの心理学は社会心理学、生物遺伝学、また人間の存在と本質の基本的な問題を扱う実存的人間学と協力していかなければならいでしょう。そして将来はこれまでよりも哲学に近いかたちで振舞うようになるでしょう。同様に哲学的に言えば、パーソナリティの心理学は方法論的には大勢に従うでしょうが、反面、哲学的かつ形而上学的側面ともつばら結びつた方法は受け入れることができないでしょう。なぜなら全体としての人間は多くの要素や機能を備えているので、心理学は今後、人文科学であるとともに自然科学としても存在しなければならないからです。人はこれらの要素や活動を越えた関係を受容することができます。今後も従来と同様、人は価値や義務と密接な関係をもっていくことでしょう。生活に密着した心理学は一定の地域や社会に住む個人がつつみこまれている時代的環境を、前記の価値や義務とともに考慮する必要があります。こうして始めて心理学は人の生命の限りを越えて個人のパーソナリティや社会の現実からもたらされた課題に正しく対処することができるのです。